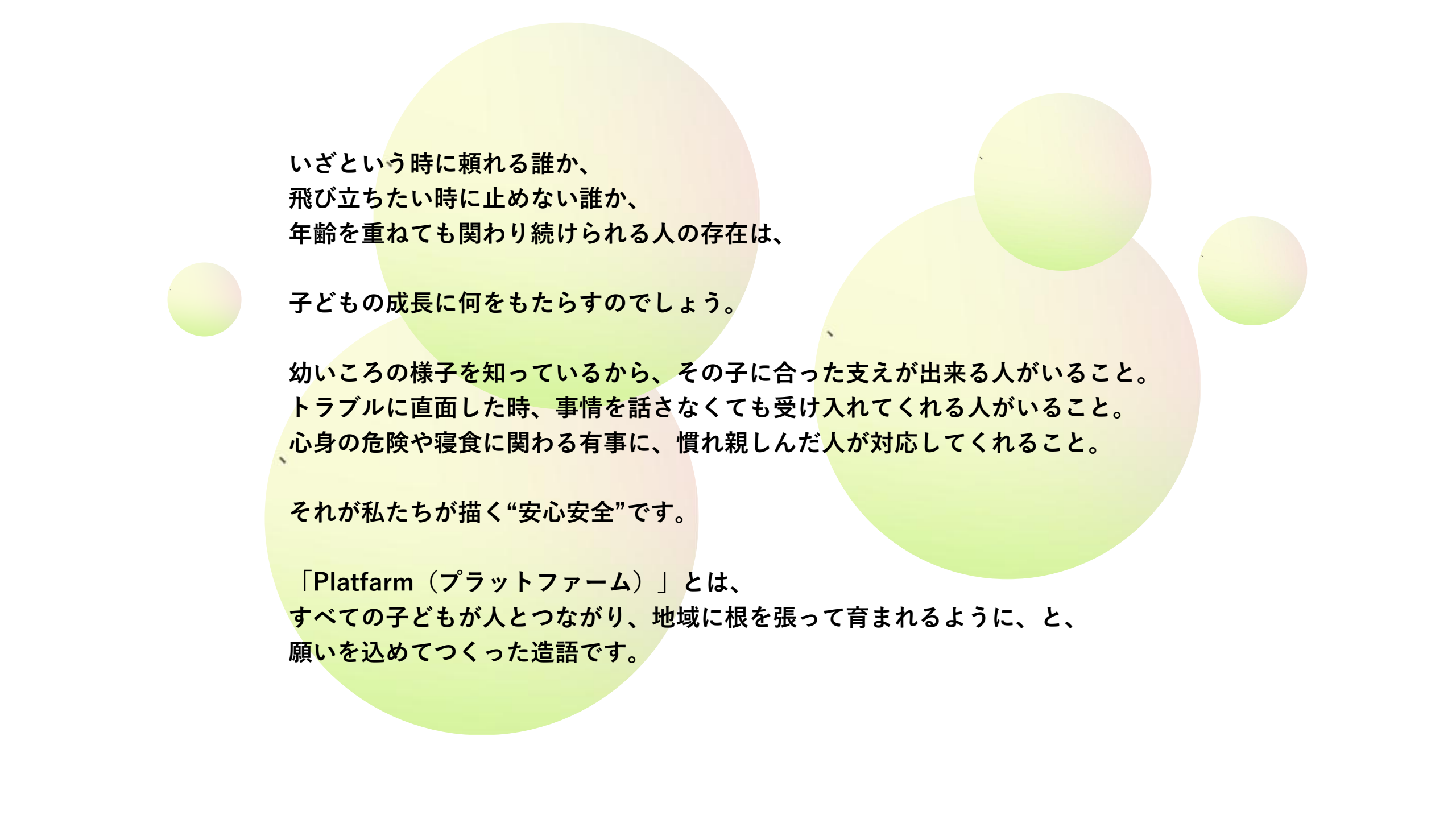


子どもの心を見守り続ける

Platform

特定非営利活動法人プラットフォーム



いざという時に頼れる誰か、
飛び立ちたい時に止めない誰か、
年齢を重ねても関わり続けられる人の存在は、

子どもの成長に何をもたらすのでしょうか。

幼いころの様子を知っているから、その子に合った支えが出来る人がいること。
トラブルに直面した時、事情を話さなくても受け入れてくれる人がいること。
心身の危険や寝食に関わる有事に、慣れ親しんだ人が対応してくれること。

それが私たちが描く“安心安全”です。

「Platform（プラットフォーム）」とは、
すべての子どもが人とつながり、地域に根を張って育まれるように、と、
願いを込めてつくった造語です。

バリュー・ミッション・ヴィジョン・パーパス・サービス

VALUE

子どもの力を信じる

MISSION

0~10歳の子どもの心の孤立をなくす

VISION

虐待など困難な環境にあっても、
すべての子どもが生きられる
リラックスした社会

PURPOSE

子どもの心を見守り続ける

SERVICE

1. 心のへこみを、まあるくする
2. 本来の表情を取り戻すお手伝い



【団体名称】

特定非営利活動法人プラットフォーム

【活動方針】

子どものエンパワメント

地域の大人ができることの可視化と実践の機会の提供

地域を起点とした多セクター連携による仕組化

【事業内容】居場所事業、訪問看護事業、多世代交流事業、相談事業、生活支援事業、

家庭訪問型子育て支援事業、啓蒙啓発事業

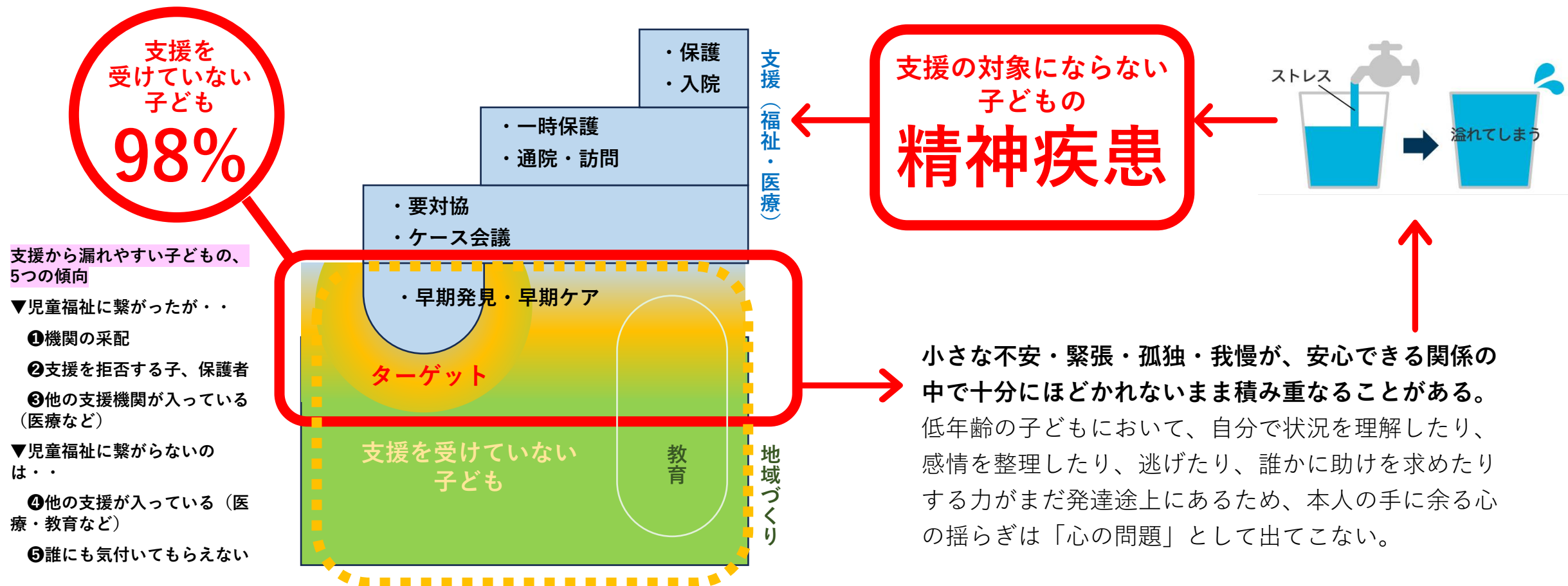
【所在地】鎌倉市御成町3-10鎌万ビル2F A

【設立年度】2021年5月14日

【役員】理事長 北川幸子、宮本理希、小林祥子、テンプル直美、監事 根本雄司

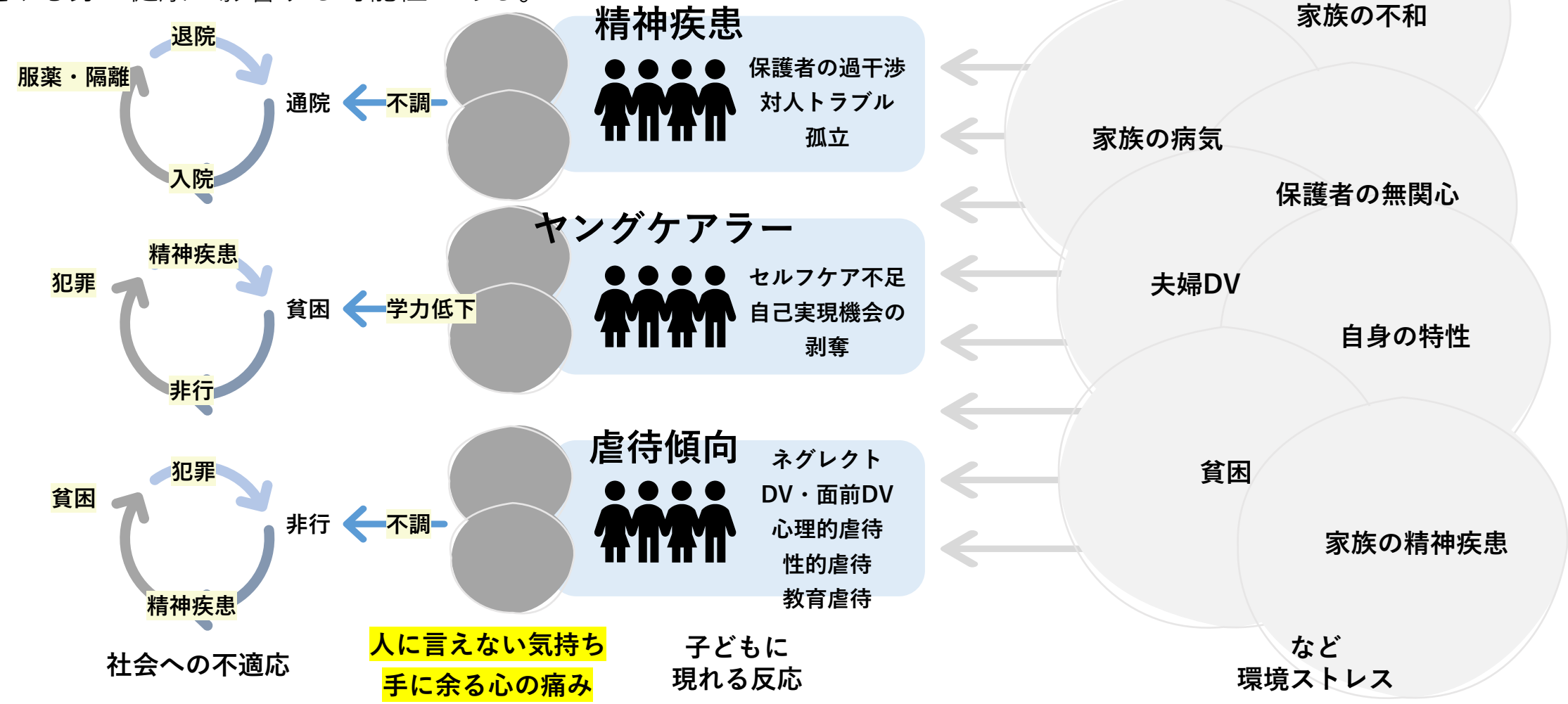
家庭で生活をする、低年齢の子どもの心理的ストレス。

家庭内の慢性的な不安定さや緊張が、本人の意思とは関係なく心身に蓄積することがある。
子どもの心の孤立が深まると、後の精神疾患や生きづらさにつながる。



私たちが対象にする子ども達

支えたいのは、行政の支援対象にならない98%の子ども達の「心」。
子どもが自分一人では処理しきれない不安や緊張、孤独などが、安心できる関係によって十分に調整されないまま繰り返されると、慢性的なストレス反応につながり、発達や心身の健康に影響する可能性がある。



社会の現状

日本は子どものメンタルヘルスを支える仕組みが欠如している。

【子どものメンタルヘルスの不調の広がりを読み解く】

- ・全国の子どもの自殺数変遷：令和7年 532人 ※過去最大数
(厚生労働省自殺対策推進室 「令和7年中における自殺の状況令」)
- ・全国の児童相談対応数：令和5年：225,509件 ※過去最大数
(こども家庭庁 「令和7年度子ども白書」)
- ・20歳未満の精神疾患総患者数：令和2年：59.9万人 ※平成11年に比し5倍以上増加。
(公益財団法人日本精神科病院協会 「児童思春期精神医療における支援策等の検討」)
- ・いじめ・不登校・暴力行為の数
(文科省「令和6年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果の概要」)
 - ・いじめの認知件数 (小中高)：769,022 ※過去最大数
 - ・暴力行為発生件数 (小中高)：128,859 ※過去最大数
 - ・不登校数 (小中)：353,970 ※過去最大数
- ・子どもの健康ランキング：身体的健康／1位、精神的幸福度／32位
(UNICEF「レポートカード19」2025)

【地域に広がる支援】

- ▼子ども食堂の数と利用者 (むすびえ「子ども食堂全国箇所数調査2025年12月速報値」)
 - 数：12,601箇所→公立小学校の約7割
 - 利用者：年間2533万人 (子どもは1732万人)
- ▼学習支援事業の数と参加者数 (厚生労働省「子どもの学習・生活支援事業に関するアンケート調査2025年3月」、「生活困窮者自立支援法等に基づく各事業の令和5年度事業実績調査」)
 - 割合：全国市町村の約7割
 - 参加者数 (実人員)：40,630人

【0～18歳の課題意識】子ども食堂・学習支援等、地域・企業が一丸となって取り組む支援が盛り上がり増えている。それでもうつうつとした気持ちで過ごしている子どもや、数字には現れない基礎的な生活を得られていない子どもがいる。こういった数字に現れない子ども達の存在は、子どもの精神疾患、虐待相談件数、若者の自殺者数などから読み解くことが出来る。いずれも増加、および若年化も指摘されており、私たちは、子どもが生きるために支援を必要とする社会に生きている。

こども・若者、子育て家庭を取り巻く状況

他方、こどもの自殺が過去最多、出生数が統計開始以来最低となるなど、**こどもたちを取り巻く環境は依然として厳しく、少子化も歯止めが掛かっていない。**

2023 年の19 歳以下の**こども・若者の自殺者数**は773 人と**過去最多**
10 歳代における死因は自殺が最多
15～29歳の死因の約半数が自殺

2023 年度の学校での**いじめの重大事態**の発生件数は**過去最多**

小・中学校の**不登校児童生徒数**は、2023 年度において**過去最多**

2023 年度の児童相談所の**児童虐待**相談対応件数は、22.5万件
児童虐待の防止等に関する法律制定直前 (1999年) の**約19 倍に増加**

日本のこどもの**精神的幸福度**は、先進国**38カ国中37位**
子どもの幸福度の結果：日本の分野別順位 <総合順位は20位> (本文 p.11)

2024 年の**出生数**は 68 万 6,173 人で、統計を開始した 1899 年以來、**過去最少**

分野	指標
精神的幸福度 (37 位)	生活満足度が高い15 歳の割合
	15～19 歳の自殺率
身体的健康 (1 位)	5～14 歳の死亡率
	5～19 歳の過体重 / 肥満の割合
スキル (27 位)	数学・読解力で基礎的習熟度に達している15 歳の割合
	社会的スキルを身につけている15 歳の割合

データソース：こども家庭庁「令和7年版子ども白書」及び、UNICEF「インテンティ レポートカード16 子どもたちに影響する世界 先進国の子どもの幸福度を形作るものは何か」(2020)を基に、デロイト作成

「こどもとともに成長する企業構想」について (事務局説明資料) 令和8年2月12日 より、一部抜粋

5

「子どもの心の孤立」とは？

1. 「主観的な孤独」と「つながりの欠如」の掛け合わせ
単に「物理的にひとりである（客観的孤立）」だけでなく、
「自分のしんどさや本音を、誰にもシェアできず、安心できる人や場所にアクセスできない状態」

2. 「見えない孤立」であること
学校に通っている、家族と同居しているなど、一見すると
「孤立していない（周りに人がいる）」ように見える子ども
であっても、心の中では誰にも頼れず信頼できる大人がいない状態

3. 危機（虐待・不登校・非行・自殺など）の前段階のサイン
何らかの深刻な社会問題（事件や制度的課題）として表面化する前に、「身近に助けを求められるつながりがないこと」

及ぼす影響

1. 精神面への影響（自己否定のループ）

（1）強烈な自己否定と無価値感:

「誰にも助けてもらえないのは、自分に価値がないからだ」と思い込むようになる。

（2）他者への不信感の定着:

「どうせ大人は助けてくれない」「誰も自分を理解してくれない」という認知が定着し、周囲からの好意や支援の手すら拒絶してしまうようになる。

（3）メンタルヘルスの悪化:

不安障害や抑うつ状態、過度な無気力（アパシー）を引き起こし、[こども家庭庁の調査](#)でも孤独・孤立感が高い子どもほど幸福度が著しく低いことが示されている。

2. 身体面への影響（ストレスの身体化）

（1）原因不明の身体症状:

朝起きられない、激しい腹痛や頭痛、吐き気などが頻発する（いわゆる心身症や起立性調節障害の悪化）。

（2）睡眠・摂食の異常:

深刻な不眠や過眠、あるいは拒食や過食といった形で、生命維持に直結するリズムが崩れていく。

3. 行動面・つながりへの影響（不登校や非行、偽りの居場所）

（1）社会的な撤退（不登校・ひきこもり）:

傷つくことを恐れ、学校や教室という集団社会から完全に身を引いてしまう。

（2）自傷行為や依存症:

心の痛みを紛らわせるために、リストカットなどの自傷行為に及んだり、ネット・ゲーム、市販薬の過剰摂取（オーバードーズ）に依存したりする。

（3）危険な「偽りの居場所」への逃避:

優しく近づいてくる悪意ある大人（SNS上の犯罪者や非行グループ、トータル境界に代表される路上コミュニティなど）を「唯一の理解者」と誤認し、犯罪やトラブルに巻き込まれるリスクが跳ね上がる。

4. 長期的な人生（将来）への影響

（1）信頼関係を築く力の低下:

大人になっても人を信頼できず、職場の人間関係やパートナーシップで孤立を繰り返す傾向があります。

（2）貧困や孤立の連鎖:

学業の遅れや就労の困難（ひきこもりの長期化など）につながりやすく、社会的な孤立が大人になっても固定化してしまうリスクがあります。

社会的背景（解説）

背景・要因	子どもに起こり得ること
地域・親族とのつながりの希薄化	家庭の外に、子どもを気にかけてくれる大人が少なくなる
学校・友人関係の困難	失敗、いじめ、対人関係の不安などを誰にも相談できず、一人で抱える
子どもの相談先の不足	「親には言えない」「学校には言いたくない」というときの第三の相談先がない
養育者の孤立・負担	保護者自身が支えてくれる人を持たず、子どもへの応答的な関わりが難しくなる場合がある
家庭内の不安定さ	夫婦間の葛藤、親の精神的不調、家庭内の緊張などを子どもが感じ取り、顔色をうかがう・安心できない
経済的困難・生活上のストレス	家庭全体のストレスが高まり、子どもが不安や我慢を抱えやすくなる
子ども自身の発達特性・性格等	感情を言葉にすることや助けを求めることが難しい場合がある
支援制度とのミスマッチ	「虐待」「不登校」「障害」「精神疾患」などの明確な支援要件に該当しないため、支援につながらない

解説

1. 学校や地域における「頼れる大人の不在」

家庭以外の場所でも、子どもが「利害関係のない大人」に弱音を吐ける機会が激減している。

（１）地域コミュニティの希薄化：
かつてのように近所のおじさん・おばさん、親戚など、親以外の大人にふらっと愚痴を言ったり可愛がられたりする「斜めの関係」が失われている。

（２）学校の先生の多忙化：
教員の業務過多により、生徒一人ひとりの「小さな変化」や「見えないSOS」に気づいたり、じっくり話を聴いたりする時間が十分に確保できなくなっている。

2. SNS・デジタル環境がもたらす「つながりの質の変化」

スマートフォンやSNSの普及は、一見子どもたちを24時間誰かとつなげているように見えますが、かえって心の孤立を深める原因になっている。

（１）「つながり」の過剰と「本音」の喪失：
SNS上では常に誰かとつながっているため、既読無視やグループ外しの不安（FOMO）に怯え、常に「周囲に合わせた自分」を演じ続けなければならない環境にある。

（２）承認欲求のインフレと自己嫌悪：
他者のキラキラした日常や数字（いいね数）と自分を比較し、「自分には価値がない」という強烈な疎外感を一人で抱え込みやすくなっている。

3. 家庭環境の構造変化と「親の余裕のなさ」

子どもにとって最も身近な安全基地である家庭が、機能しづらくなっている現状がある。

（１）共働き・ひとり親家庭の増加と時間的貧困：
親が日々の生活や労働に追われ、子どもとゆっくり話す時間や精神的なゆとりが物理的に不足している。

（２）「親を困らせたくない」という子どもの配慮：
親の疲れた姿やイライラした様子を日常的に見ている子どもは、「これ以上迷惑をかけられない」「心配させたくない」と考え、自分の悩みや本音を家庭内で隠す。

4. 現代特有の「過度な自己責任論」と「失敗への恐怖」

社会全体に漂う空気感も、子どもの心を追い詰めています。

（１）「自分でなんとかしなきゃ」という呪縛：
幼い頃から「人に迷惑をかけてはいけない」「自己管理が大事」と教育されることで、助けを求めること（受援力）＝恥・ダメなことだと思い込んでしまう。

（２）評価社会と「良い子」のプレッシャー：
失敗が許されない空気の中で、「期待に応えられない自分」を周囲に見せられなくなり、悩みを抱えたまま心を閉ざしてしまう。

社会的背景と私たちの活動

背景・要因	子どもに起こり得ること
地域・親族とのつながりの希薄化	家庭の外に、子どもを気にかけてくれる大人が少なくなる
学校・友人関係の困難	失敗、いじめ、対人関係の不安などを誰にも相談できず、一人で抱える
子どもの相談先の不足	「親には言えない」「学校には言いたくない」というときの第三の相談先がない
養育者の孤立・負担	保護者自身が支えてくれる人を持たず、子どもへの応答的な関わりが難しくなる場合がある
家庭内の不安定さ	夫婦間の葛藤、親の精神的不調、家庭内の緊張などを子どもが感じ取り、顔色をうかがう・安心できない
経済的困難・生活上のストレス	家庭全体のストレスが高まり、子どもが不安や我慢を抱えやすくなる
子ども自身の発達特性・性格等	感情を言葉にすることや助けを求めることが難しい場合がある
支援制度とのミスマッチ	「虐待」「不登校」「障害」「精神疾患」などの明確な支援要件に該当しないため、支援につながらない

子どもと若者の図書館

多世代交流
生活・宿泊支援



- ①1人になれる場
- ②信頼できる人との出会い
- ③助け合う体験

家庭訪問型子育て支援 ボランティア



保護者の孤立を防ぎ、子どもを社会とつなぐ

子どもと若者の訪問看護



- ①支援の糸口をつくる
- ②家族・家庭環境の支援
- ③発達特性の支援
- ④経済・移動の負担なし

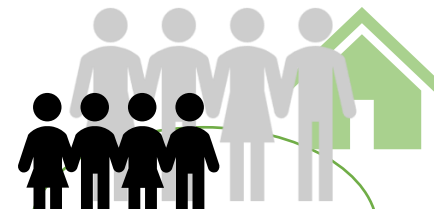
子どもと若者の図書館



「自分」でいられる
時間を過ごす



子ども同士で
助け合う



信頼できる人と
出会う

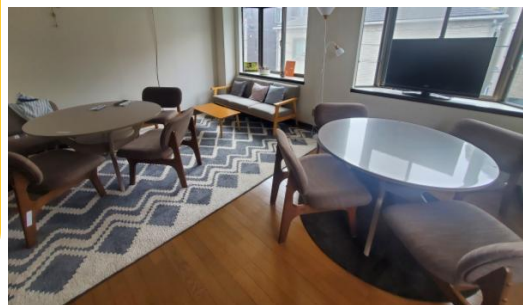
多世代交流

信頼できる人と出会う



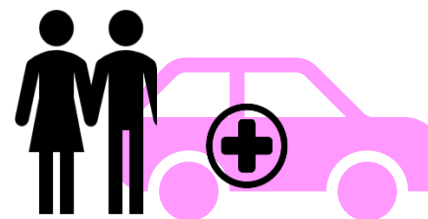
生活・宿泊支援

入浴・食事・仮眠・洗濯



訪問看護

看護師が家庭生活を支援



家庭訪問型 子育て支援 ボランティア



活動（1）

子どもと若者の図書館

子どもの心の孤立を防ぐ、
子ども同士の助け合いの受け皿

- 対象
- ・ 0~25歳の子どもと若者
 - ・ 困り感の有無に関らず、すべての子ども達

- 概要
- ・ 場所：横須賀市内に3か所（衣笠、船越、津久井浜）
 - ・ 開所：週2～5日9:00~18:00不定期に開館
 - ・ 展開：東京、静岡など、延べ16館に展開

子ども同士の助け合いが自然発生する場の条件

1. 他者が支え合う様子を見ている
2. 思考・感情の自由を感じている
3. 行動の自由を感じている
4. 自身が安心を感じている



やる気のある住民ではなく、
、いたってフツウの人たち



年間延べ利用者数

- ・ 未就学児：約400名
- ・ 小学生：約4,500名
- ・ 中学生：約250名
- ・ 高校生：約100名

年間延べ参加者数

- ・ 学習サポート：約140名
- ・ 子ども食堂：約600名
- ・ 多様な体験学習：約300名

分野を横断した連携機関

- ・ 児童相談所
- ・ 小・中学校
- ・ 療育センター
- ・ 相談支援センター
- ・ 教育委員会
- ・ 自治会

子どもが主体になる場づくり

- ・ その時の気持ちに合わせて過ごし方を自由を選ぶ
- ・ 大人は子どもから話しかけられるまでそっと見守る
- ・ 「おかえり」「またね」家庭的な声かけをする人がいる



衣笠駅徒歩1分図書館



津久井浜団地徒歩0分図書館

神奈川県 の県営団地の空き部屋を活用。団地の住民の85%は65歳以上。0~25歳の子どもと若者と高齢者、多世代交流の場。



- ・開館：毎週3日、主に10:00~17:00に不定期に開館
- ・利用者：0~80代まで、1日約10名ほど、団地住民・近隣の人々など
- ・催し：カフェ、映画鑑賞、遊んで療育、絵本、宿題サポート、子ども食堂

神奈川県との協働事業を2023~2025年実施。子どもを中心とした多世代の居場所を、市民が行政・専門職を巻き込んで実施。子ども主体の場づくり、子育て、介護など多様なテーマを、横須賀市、地域包括支援センター、保育・療育関連、小中学校、医療・福祉事業所、学生団体、民生委員、自治会など、様々な機関や団体と一緒にみんなの暮らしやすい地域社会を目指しています。

津久井浜団地徒歩0分図書館



船越小学校徒歩1分図書館

子どもも自由に過ごせるカフェから、子ども向けの訪問看護ステーション、生活サポートまで。社会とつながり生活を支える場。



- ・訪問看護
- ・生活サポート
- ・図書館
- ・カフェ
- ・ショップ

- ・開館：水~土曜日、9:00~18:00
- ・併設：カフェ、図書スペース、生活サポートスペース、訪問看護事務所
- ・催し：子ども食堂、学習支援、保護者のお話し会、支援者同士の交流会

近隣の中学校と連携し、学校公認の居場所として運営。入浴・洗濯・食事・仮眠などできるように、居住スペースを備え、ショートステイ、レスパイト、家出など、家庭生活の支援から社会生活の支援まで、段階的に幅広く対応しています。

(※生活サポートは、別ページを参照ください)

船越小学校徒歩1分図書館



その他、子どもと若者の図書館

「メタバース図書館」

子どもと若者の図書館がバーチャル空間になった！

東京科学大学×たまプラーザ駅徒歩2分図書館のコラボ企画。2025年冬に開設！

活動（2）

やさしい学校

多世代交流・無料ワークショップ

人にやさしくする知恵や体験を子どもと大人が共に学び考え、相談しやすい環境をつくる。まちのひとが得意なことを持ち寄って参加費無料のワークショップを実施、定期的開催することによって、参加者同士の交流と関係性を育む。

- ・ 実施コマ数：延べ約150コマ
- ・ 参加人数：延べ約1,000名



コマ一覧 (8月)

- 8/05 お気に入りアイテムをおしゃれに収納しよう
- 8/07 日本人には欠かせない調味料 お醤油の話
- 8/08 政治の舞台を覗いてみよう！夏休み議場見学ツアー
- 8/08 インドの緑の魔法の粉メディ ✨ で本来の自分に目醒める
- 8/09 すかっこのしゃべり場
～夏をのりきる！暑さ対策を考えよう～
- 8/10 大きな"心の絵"を描こう
- 8/12 クリスタルボウルサウンドバス&ホワイトヘナ
- 8/14 伝えていきたい、いのちの話 いつ話す？いま話そうよ
- 8/14 アタマとカラダのお手当て 頭蓋仙骨療法
- 8/15 ライアーミニミニコンサート
- 8/19 へいわをまなぶ、かんがえる
～ぼくたち・わたしたちのしゃしんてんをひらこう～
- 8/22 楽しい漢字！漢字がもっとおもしろく すきになるお話
- 8/23 キヌイチ未来ミーティングwith GROWモデル
- 8/26 キヌイチ大掃除大会

ファミリーコンサート

皆んなで一緒に歌おう！

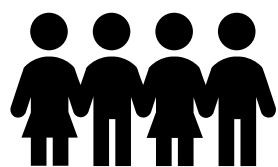
童謡、懐メロ、ポップス、ジブリ、ディズニーなど

- ・ 開催：8月20日(日) 10:30～11:30
- ・ 場所：津久井浜県営団地・集会所
- ・ 対象：子ども～大人・シニア
- ・ 料金：500円
- ・ お申込み：8月18日(金)19:00まで



私設図書館「子どもと若者の図書館」

こんな小中学生に出会ってきた



鍵が無くて、夜まで家に入れない。
家族が戻るまで過ごす場所がなく、
以前に来たことのあった図書館にきてみた。



昼ご飯を食べ損ねた、おなかがすいた



つかれた



友達と待ち合わせ

個別ケース



幼少期から
家庭内暴力（虐待）の疑い

1. 相談室・不登校・うつ傾向
2. 精神科クリニック通院
3. 人格障害・他害自傷行為
4. 入退院を繰り返し替える



幼少期から
ネグレクトの疑い

1. 傷害トラブル
2. 非行行動
3. 不登校
4. 児童相談所に本人から通告



幼少期から
虐待・ネグレクトの疑い

1. 不登校
2. 日本語・学習遅延
3. ネグレクト
4. 母親の自殺未遂
5. 精神疾患の疑い

活動（3）

子どもと若者のお宿

生活・宿泊支援

住宅らしさ×医療対応×学び・遊びが
融合できる、地域の拠点。

入浴・食事・仮眠・学習・送迎など、まるっとサポート。基礎的な生活習慣を身につけ、安心できる機会を提供。子どもの心と身体を“暮らし”の中からケアする「支援っぽくない支援」。



対象

- ・ 0~25歳の子どもと若者
- ・ 困り感のある子（虐待、障害、精神疾患、貧困、ヤングケアラー、不登校など）

【活用事例】 包括的な支援体制を構築し変化が起きた子ども
外国ルーツ・母子家庭・精神疾患の母親と生活をする小学生

- ・ 学校に通えず、生活リズムも乱れていた
- ・ 衛生習慣がなく、家はゴミの山
- ・ 支援内容：
 - ・ 教育環境の整備支援：登校支援・学習支援・多言語対応の会話支援
 - ・ 生活習慣の形成支援：室内の掃除・通院同行・送迎支援・調理体験
 - ・ 子ども食堂での栄養支援・孤立予防の交流支援
 - ・ 母親のメンタルケア、緊急保護の対応も実施

▶成果：母子共に安定し、安定的な通学を再開

▶連携の効果：ケース会議の発足、学校での日本語授業を再開、子育てサポート制度の検討、医療機関との連携など、社会資源の活用を関係者に働きかけ家庭と学校の両面から児童の生活環境を整備し家庭全体の再起を支えた。

・ 訪問看護
・ 生活サポート

・ 図書館

・ カフェ
・ ショップ



活動（４）

ホームスタート

子どもと若者の図書館×家庭訪問型子育てボランティア



なぜ、子どもと若者の図書館が
「ホームスタート」を運営するの？

自宅に知らない人が来るのは
ちょっと・・・という時、
図書館でお互いを知り合ってから
自宅に招き入れることが出来る

1. イギリスで50年ほど前にはじまった市民活動
2. 1か月のあいだ、週1回2時間で訪問する
3. 子育ての経験をもつ方がなれる
4. 0～6歳までのお子さんのいるご家庭が対象
5. 無料で利用が出来ます（交通費は団体が負担）
6. 横須賀では初。全国32都道府県の約120地域で実施
7. 全国で約3,700名のボランティアさんがいます
8. 1年間で3,271家庭が利用、年々増えています
9. 今年12月から訪問活動スタート

	ホームスタート	ファミリーサポート
対象	ママ・パパのケア	子どものケア
役割	地域の子育て経験者が無償で自宅を訪問し、一緒に過ごす	地域の会員が有償で子どもを預かる
内容	一緒に行く・相談に乗る	預かり
費用	無料	有料 (1時間600～800円程度)
つながり	●ボランティア同士の学びやネットワーク ●他地域とのネットワーク	地域による

活動（5）

子どもと若者の訪問看護

子ども向けの訪問看護



1. 年代：主に、小学生～30代
2. 内容：精神疾患、虐待、発達障害、ひきこもり、不登校、自殺企図、自閉症など
3. 看護：対話、入浴介助、外出支援、バイタルチェック、排泄ケア、精神的ケア、保護者支援
4. 利用者数：約45名（2026年9月時点）
5. エリア：横須賀、鎌倉、三浦、横浜、逗子
6. 関係機関：医療機関、教育機関、福祉機関、児童相談所
7. 付随支援：レスパイト、一時保護、支援者支援、啓蒙イベント
8. 開設：2025年5月（2024年11月から、前進となる「訪問サポート」を開始）

医療サービス「子どもと若者の訪問看護」

こどもが地域で育つ・生きるを支える



(1) 訪問看護ステーションとは？

看護師や保健師などの専門職が自宅を訪問し、医療的・生活的支援を提供する。
通常は医療的ケアや退院後の生活支援に使われることが多いが、福祉的な困難を被っている子どもへの支援にも有効。

(2) 具体的な対象と主なサービス

いままでは対象にならなかった子どもたちを対象にする

主な対象 (0～18歳)	主な看護サービス	その他、生活支援・相談
不登校・ひきこもり状態の子ども	メンタルケアなど	
発達障がい・精神的困難	メンタルケア・服薬管理など	家族の相談対応、保護者ケア
医療的ケア児	バイタルチェック・医療処置	居場所との連携・心理支援
慢性疾患・難病のある子ども	バイタルチェック・医療処置	衛生・食事・登校支援
NICU・GCU退院児	医療機器の管理（吸引等）	外出サポート
	発達リハビリ	

(3) 訪問看護で実現できること

不登校の子どもへの支援

体調不良の他にも、学校に行かないことに対する自責や孤独に関する、精神的サポートが重要。

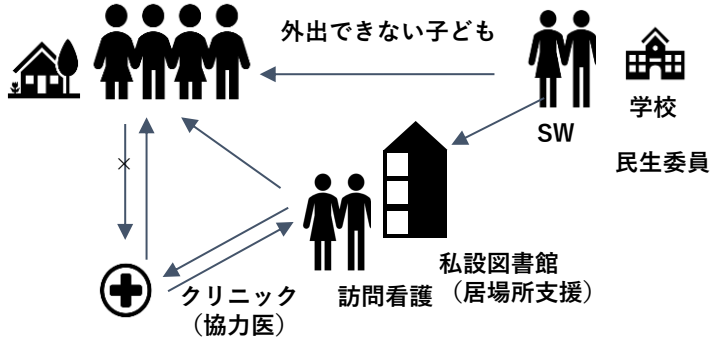
- 定期的に話を聞き、心理的な安定を促すメンタルケア
- 発達支援・日常生活リズムを整える
- 医療的な立場から学校や行政、福祉と連携する

虐待を受けている子どもへの支援

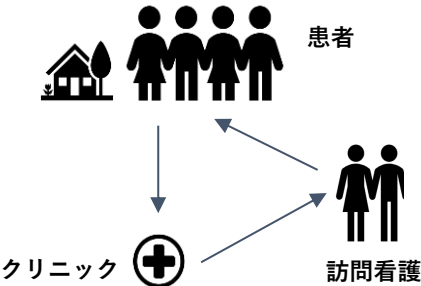
虐待の兆候を掴み、適切な機関と連携し命を守る。

- 家庭内の様子や、子どもの身体や精神の状態を観察。
- ケガや心の状態の異常を察知し、虐待の兆候を発見する
- 児童相談所や医師、学校などへの報告・連携を行う。
- 保護された後の心身の回復を継続的に支援する。

<パターンA>
まだ医療につながっていない子ども。
居場所を通じてアセスメントを行い協力医が訪問診療を行う

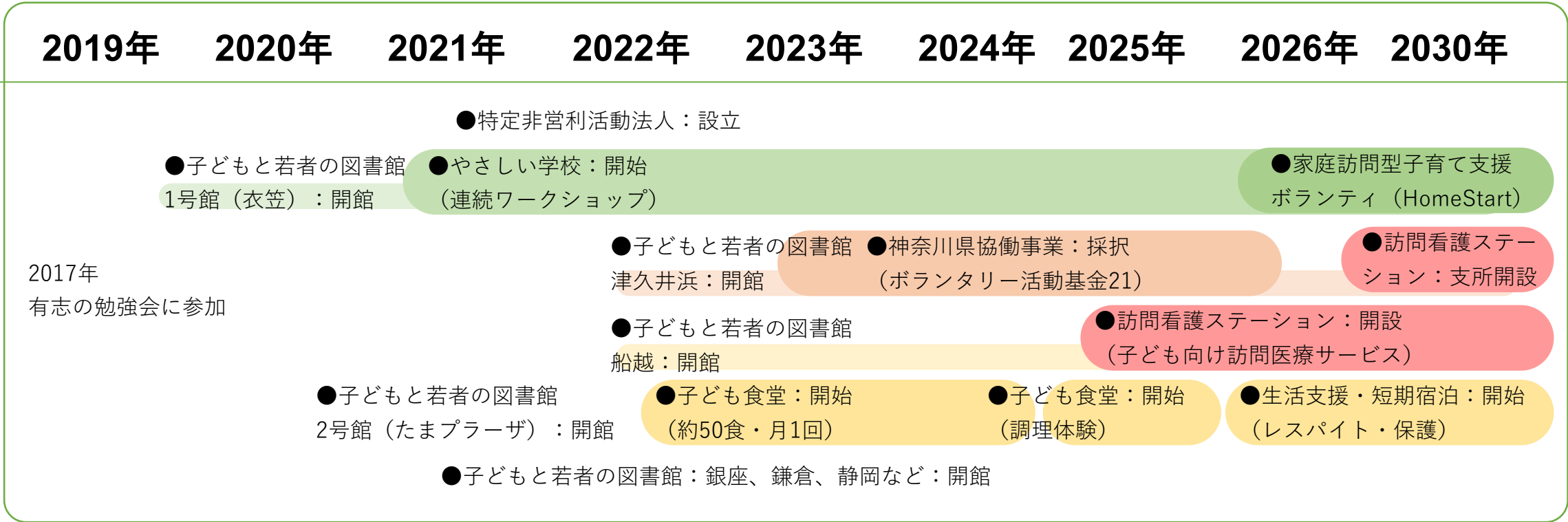


<パターンB>
すでに医療につながっている子ども。
医療機関等の紹介で訪問看護を行う。



Platformのあゆみ

全国の児童心理治療施設を視察し、2017年から児童福祉職員の勉強会に参加。2019年に私設図書館を開館してから未就学児～小中高生の間として定着し、2022年から個別支援・生活支援を開始。
通常の利用者の増加に加え、子どもの変化と共に個別支援の必要性を確信し、全国でも珍しい子ども向けの訪問看護ステーションを開設。以来、支援の手立てがなかった精神疾患、障害の子どもを対象に医療支援を行っている。
近年では、図書館と訪問看護で、子どもを社会につなぐ段階的な支援を独自に提供している。



1 「子ども同士の支え合い」で、 大人が届かない、子どもの気持ちを支える

大人が気付けない子どもの心の機微にも、子ども同士は気づき寄り添える可能性を秘めている。

2 「事前ケア」で、早期に回復できる関係 や場所を、あらかじめ地域の中につくる。

地域と専門機関が共に子どものケアの目標や手順、これに必要なまちづくりの方針を平時から検討・共有できる仕組み。

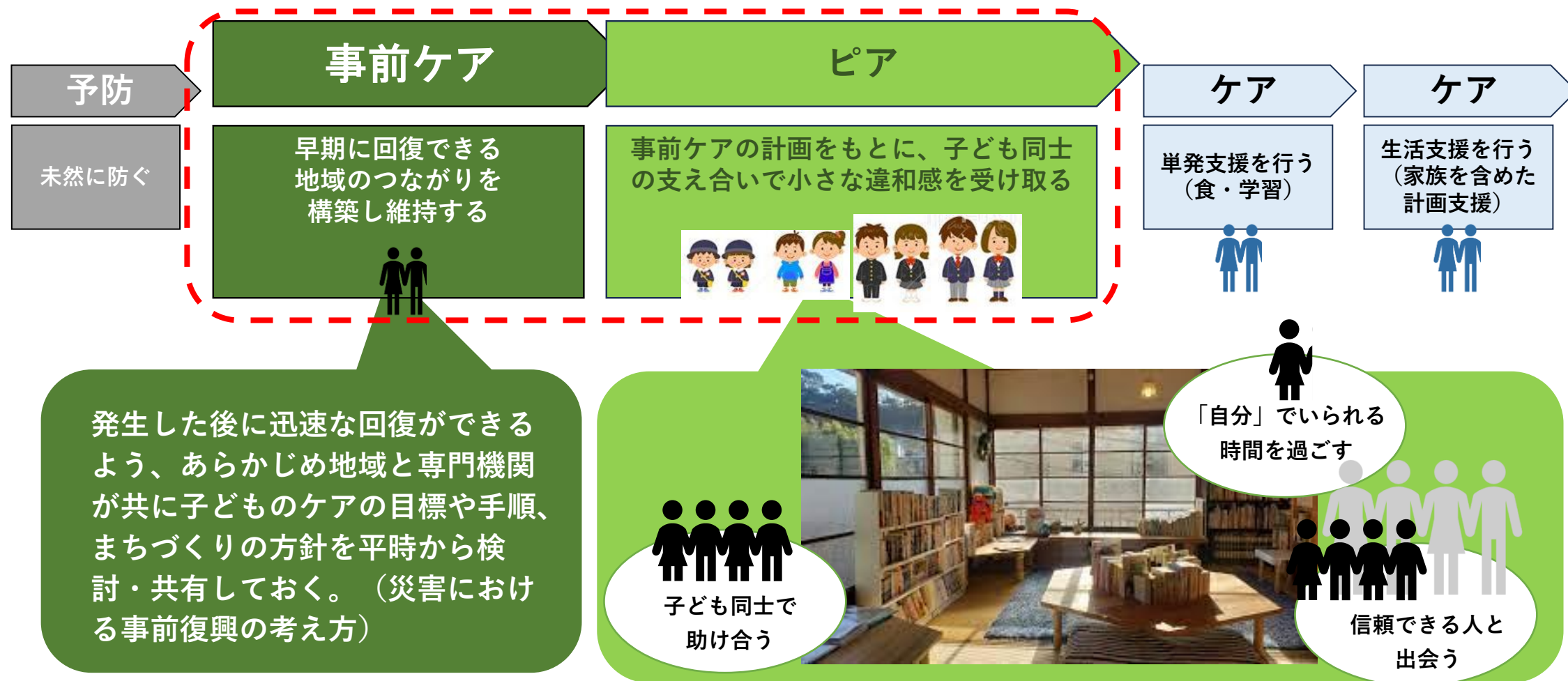
3 日常から、緊急保護まで。 子どもが安心できる一気通貫の支援構成

日頃から子どもと地域住民が信頼関係を育み、いざという時に、安心できる人の元で安全を確保することが出来る。子ども目線の支援構成。

子どもの心を
孤立させない
3つのポイント

Platformの特徴（１）予防とケアの間に、２段階の関わりを設計

「事前ケア」と「子ども同士の助け合い」を設け、低年齢の子どもたちの心を支え続ける。
「事前ケア」で成長に則した迅速で柔軟な支援環境をつくっておき、
「子ども同士の助け合い」で、子どもたちの心の孤立を防ぎ、有事には早期に支援につなぐ。



特徴（２）平時から有事に備え、早期回復を図る「事前ケア」

分野を横断した段階的な事業設計により、平時から各分野との連携体制をつくる。

支援（福祉・医療）

↑

↓

地域づくり

	連携 機関	安心	関係性	感情調 整	自己理 解	自己肯 定感	社会参 加
ショートステイ	福祉						
ワンハウス	福祉						
訪問看護	医療						
HomeStart （ボランティア）	福祉						
多世代交流	地域						
図書館	教育						
出張図書館	保健						

災害における、事前復興の効果イメージ

事前復興に取り組むことで期待される効果

事前復興に取り組むことで、大規模災害が発生したとしても、復興までの期間の短縮や復興の質の向上、人口流出の抑制等につながります。

また、安全・安心な「住まいの場[※]」として、住み続けたいまちの実現を図ることで、大規模災害が発生したとしても、地域の活力や魅力等が喪失する事態の抑制が図られます。

※「住まいの場」とは、市民が実際に住む場所のことを指します。

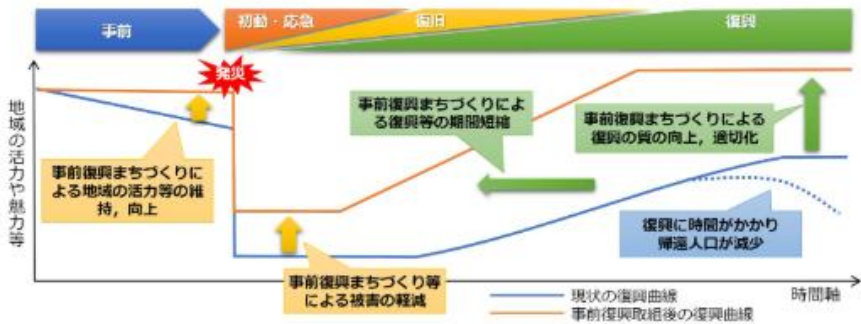
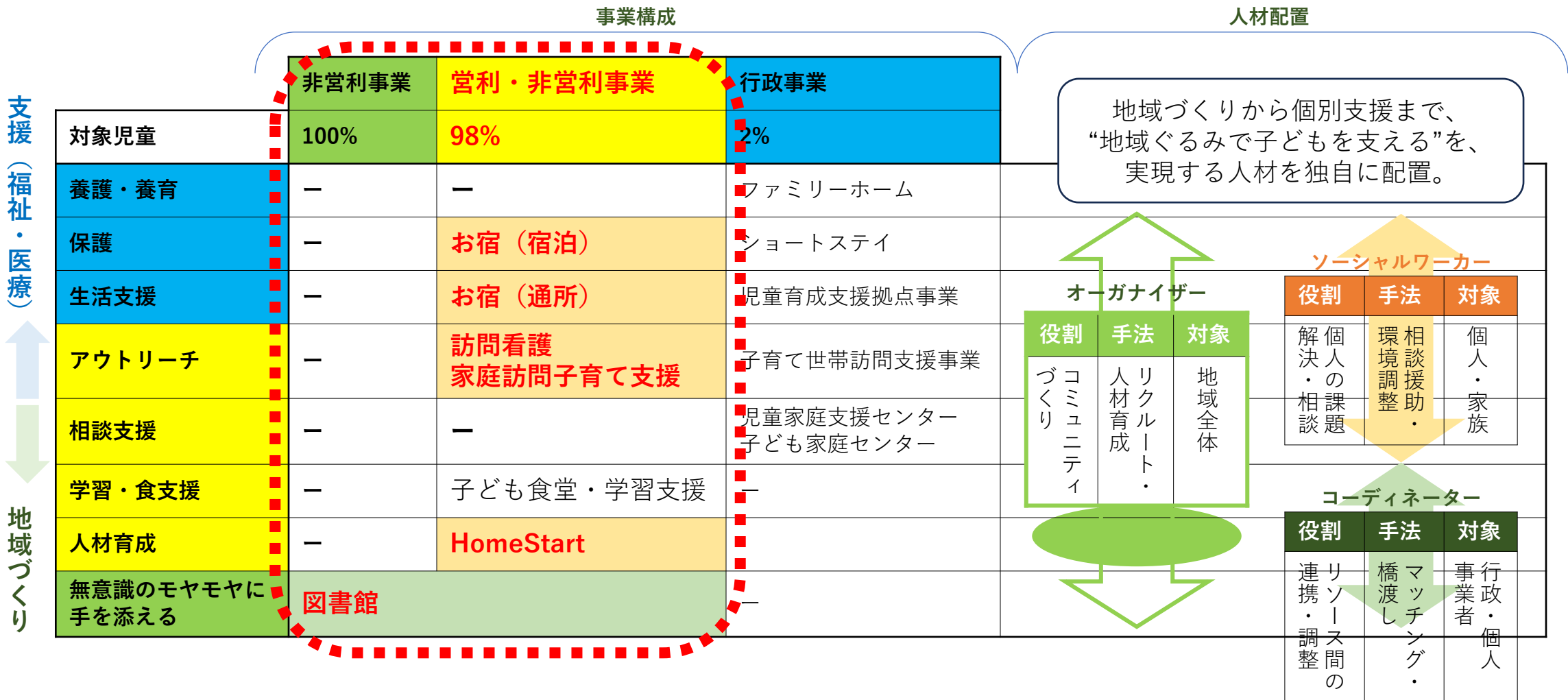


図 事前復興の取組による効果のイメージ

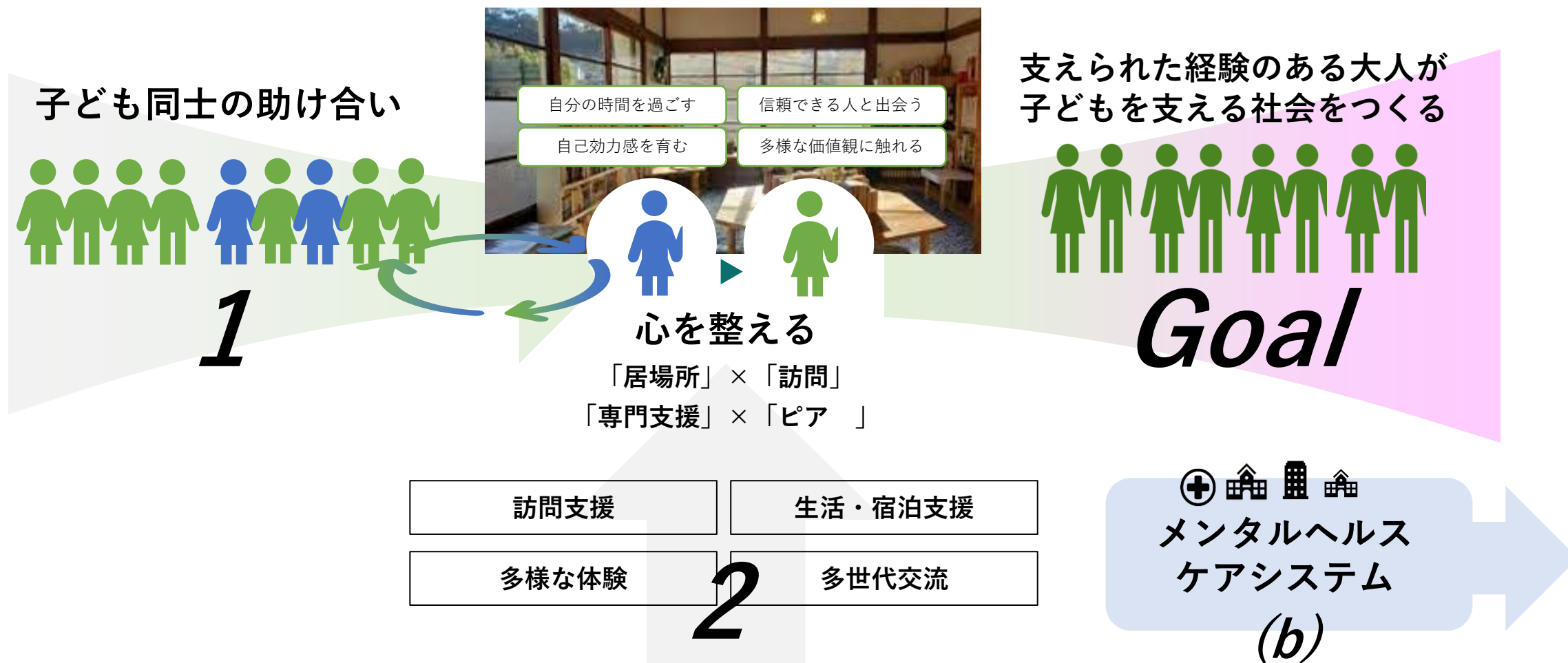
特徴（３）子どもの“日常”から“緊急保護”まで一貫して関わり続ける

楽しい日常の中で慣れ親しんだ人と場所で、いざという時に休息をとることが出来る。
子ども目線の安心安全を提供する、段階的な事業構成と人材配置。



Platformの戦略：子どもを支える地域をつくる循環を育む

子ども同士で誘い合って過ごす中で、支えられる経験を通じて、誰かを支える側になる。
子どもだけでは支えきれない有事には、大人の支援・専門職がサポートに入ることにより、
子どもは「**家庭の外と中**」の両面から生活を整える手段を得られる。



メディア掲載

神奈川新聞 2022年



毎日新聞2024年10月

多才多彩
この人に聞く

北川 幸子さん(45)

NPO法人プラットフォーム理事長

「読書は人生の宝庫。読書を通じて、自分自身を知り、他者を知り、世界を知ることができる。読書は、人生の宝庫である。読書を通じて、自分自身を知り、他者を知り、世界を知ることができる。読書は、人生の宝庫である。」

北川 幸子さん(45)は、NPO法人プラットフォーム理事長。読書を通じて、自分自身を知り、他者を知り、世界を知ることができる。読書は、人生の宝庫である。

子ども見守る「隠れ家」

私設「衣笠駅徒歩1分図書館」を運営する 北川 幸子さん 44

「子ども見守る「隠れ家」」

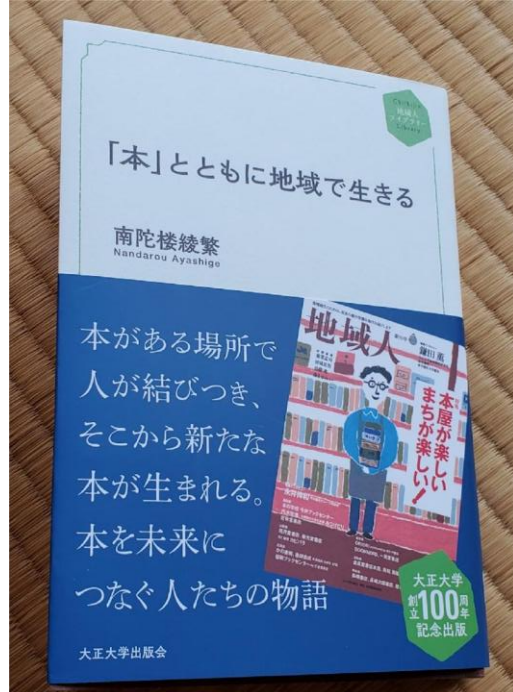
「子ども見守る「隠れ家」」

図書館で子ども見守る

「図書館で子ども見守る」

読売新聞 2024年7月

書籍 2024年10月



衣笠駅徒歩1分図書館

「衣笠駅徒歩1分図書館」

テレビ神奈川 (TVK) 2023年



黒岩知事グループ対談



テレビ神奈川 (TVK) 2022年



連携・協働実績

【連携機関】

東京科学大学（旧：東京工業大学）工学院 中谷研究室

子どもの困りごとに気づける力を育むワークショップの開発等、人間中心デザインの研究を推進。当団体では、フィールドワークの機会や研究題材の提供を行い、定期的な情報共有・意見交換を実施。

【協働事業】

かながわボランティア活動推進基金21

＜補助金＞2023年度：5,127,000円
2024年度：3,827,000円
2025年度：3,827,000円

横須賀市市民協働推進事業

＜補助金＞2024年度：500,000円
2025年度：500,000円

法人寄付

キャピタル・インターナショナル株式会社（2023年～）

助成・補助実績

【助成事業】

1. 第1回「臼井伸二未来へつなぐ基金～子どもの居場所提供支援～」100万円
2. 第2回「臼井伸二未来へつなぐ基金～子どもの居場所提供支援～」200万円
3. 第3回「臼井伸二未来へつなぐ基金～子どもの居場所提供支援～」200万円
4. 2026年「子どもの未来アクション」44万円
5. 令和6年度地域福祉活動支援事業（一般助成）・社会福祉法人神奈川県社会福祉協議会20万円
6. 令和7年度地域福祉活動支援事業（一般助成）・社会福祉法人神奈川県社会福祉協議会20万円
7. ニッセイ財団・2025年度「児童・少年の健全育成助成」59万円
8. 市民活動応援プログラム2021（生活協同組合パルシステム神奈川）20万円
9. 令和4年度「麒麟・地域のちから応援事業」30万円
10. 生活協同組合パルシステム「ささえあい基金」54万円
11. 横須賀ロータリー奉仕の基金 21万円
12. 47コロナ基金・NPO支援事業202140万円
13. 2022 年度助成プログラム（公益財団法人アイネット地域振興財団）30万円
14. 2023 年度助成プログラム（公益財団法人アイネット地域振興財団）30万円
15. 2024 年度助成プログラム（公益財団法人アイネット地域振興財団）30万円
16. 2023 年度神奈川県子ども食堂応援事業協力金 12万円
17. 2024 年度神奈川県子ども食堂応援事業協力金 12万円
18. こども食堂基金2023年度春募集 10万円
19. サンドハウスこどものみらい財団・30万円

その他

1 医療×福祉×教育が連携する 地域の生活スペースの開設。

1~3日寝泊まりできる場所を必要とする子ども・家族がいる。

1. 6年間ひきこもり15歳男子：変化のきっかけになる宿泊体験
2. 機能不全家族：睡眠・自分の空間を得て、心身を整える

現在の、精神的な医療支援ニーズのある子どもが生活できる場所。

1. 病院（入院）：ごく1部の子ども（神奈川県内40床）
2. 児童心理治療施設：ごく1部の子ども（児童相談所判断）

ワンハウスを医療連携宿泊拠点として、 バージョンアップ

1. 精神科と連携をしている（例：オンライン診療の体制）
2. 教育機関が承認をしている（例：出席扱いになる）
3. ケースワーカーが相談・紹介先として出入している

2 子どもが参加・若者の就労支援 収益事業の企画・運営。

NPO活動で得られた経験をもとに、株式会社で収益事業を開発。
若者の就労機会の創出や、売り上げの一部をNPO法人の運営に
充て、NPO活動の継続的な資金を捻出するだけでなく、支えら
れた子どもが次の子どもを支えることができる仕組みをつくり、
子ども同士の支え合いの循環をつくります。

「子どもの力を信じる」

特定非営利活動法人プラットフォーム
（子どもの心のへこみを、まあるくする）



「社会をくすぐる会社」

株式会社doode
（社会にいたずら書きをする）

NPOで、社会課題の本質と向き合い、
得られた知見や経験やご縁を糧に、
株式会社で、凝り固まった社会をくすぐる。

2027年：MISSION変更

2-21~2026年のMISSION「0~10歳の子どもの命と心を支える仕組みをつくる」のもと、支える仕組みの事業構成と構造を構築することができ、子ども同士の支え合いに地域の大人や若者、時に専門職が地域の中で手を添える関係性や環境を、横須賀の衣笠でつくることができた。

その結果、既存の場や支援は合わず、人とのつながりを必要としながらもつながり方がわからない、という子ども・家族がおり、支援者も相談を聴くのみで終わってしまう、子どもの「心の孤立」という課題を見出すことが出来た。
当団体では、次の展開として、子どもの「心」の孤立を防ぎ、また、孤立をしかけているまたは、孤立している心をケアし、社会につなぐことに取り組む。

0~10歳の子どもの「心」の孤立をなくす

- 子どもが、その時の気持ちのまま過ごせる
- 子ども同士の支え合い
- 信頼できる人と関係性をつくれる
- 保護者の孤立をふせぎ、子どもと社会のつながりをつくる